

野外教育における造形活動 (第6報)

——キャンプカウンセラーの視点から——

渋谷 寿・沖 幸子

Arts Activities in Outdoor Education (VI)

From the Viewpoint of the Counselor for Camping Activities

Hisashi SHIBUYA and Sachiko OKI

緒 言

野外教育における造形活動のあり方について、前報では基礎教育の視点から考察を行い、幾つかの理論的な留意点を明らかにした。本論では、それらを基にキャンプクラフトのあり方を具体的に検討する上で、キャンプの指導者に着目したいと考える。『ティーチング イン ザ アウトドアーズ』の第3章には、学習というものは単なる押し付けではなく、ひとりひとりが個人的に納得するような刺激的な要因(外界)に対する反応であり、教育者の課題は子どもに刺激的な要因を提供できる環境を見いだすことである¹⁾と述べられている。さらに、野外教育指導者としての教師の主要な仕事は学習を導くこと²⁾と記されている。つまり、キャンプカウンセラーは教育キャンプにおいて二つの立場にあることを理解しておかねばならない。その一つは指導者としての立場である。キャンプカウンセラーは担当するグループの子ども一人一人を様々な角度から把握し、子どもの一瞬一瞬の反応・行動に、押し付けではない形で子どもに必要な環境を見いだそうと努めなくてはならない。もう一つの立場は、指導者と同時にキャンプカウンセラー自身も子どもたちと共に学習者であるということである。研究対象としているキャンプでは、毎回約 $\frac{1}{3}$ ~ $\frac{1}{2}$ のキャンプカウンセラーが初めての参加であり、キャンプクラフトは経験がない学生も指導をとおして多くを学ぶ一つの機会となっている。つまり、キャンプクラフトに関する予備知識が少なくても学習を導くことで多くを学ぶことができるのである。このような経験をとおして培われる、キャンプカウンセラー個人的人間的資質の集合によるカウンセラー全員の総合的資質はキャンプとしての子どもの教育効果に大きな関わりを持っており、ひとつの教育キャンプの成果の鍵を握っているとも言えるのである。そこでキャンプクラフトの留意事項の具体的検討を行う上で、子どもの様々な場面に対応しているキャンプカウンセラーの視点をとおして考察を行いたいと考える。

キャンプクラフトとキャンプカウンセラー

現在、研究対象としているキャンプクラフトは、夏と冬の年2回、それぞれ幼稚園年長児と小学校低中学年児童を対象とした教育キャンプにおいて行っている。各班男女2名のキャンプカウンセラーはクラフトのマニュアルに添って約10名の子ども達の指導を行う。こういった1年サイクルのキャンプクラフトの継続した流れをスパイラルエデュケーション(図1)³⁾として捉えると次のようになる。図1における「A. 分析」は、前回のキャンプクラフトの分析と、

分析から導かれる次回クラフト実践計画を意味する。「B. 総合」は、計画に添ったキャンプクラフト実践を意味する。「C. 評価」は調査をとおしたキャンプクラフト実践の評価としての問題点の把握を意味する。このA→B→Cのサイクルが継続してA'→B'→C'へと上向きのスパイラルを形成し、キャンプクラフトの総合的次元の向上が達成されると考えられる。

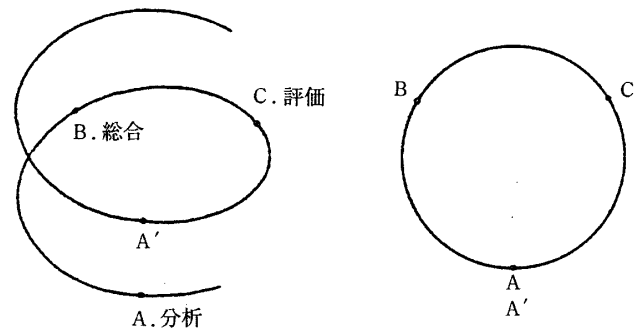


図1 スパイラルエデュケーション

ここで、指導者であると共に学習者でもあるというキャンプカウンセラーの立場を、キャンプクラフトのスパイラルエデュケーションに当てはめると次のように言うことができるだろう。図1における「A. 分析」は、初めて参加するキャンプカウンセラーにとってはクラフト実践に対するレディネスを、経験者にとっては前回のクラフトの分析とレディネスを意味する。「B. 総合」は、レディネスに添ったキャンプクラフト実践・指導を意味する。「C. 評価」は調査をとおしたキャンプカウンセラーの評価としての問題点の把握を意味する。また、既にキャンプクラフトを経験しているキャンプカウンセラーは、同一キャンプにおいてAの位置に、また何回か経験しているキャンプカウンセラーはA'というようにAとA'の間には質的な格差が生じている。つまり、スパイラルの上から見るとAとA'は同一サークル上に同一ポイントとして示されるがスパイラルの横から見るとAとA'の縦方向に格差が認められるのである。このように、一つのキャンプクラフトにおいて質的次元の異なるキャンプカウンセラーが子どもの指導・学習を行っているのである。つまり、キャンプカウンセラーを一律の要因として捉えるのではなく、キャンプクラフトとしてのスパイラルと、一人一人のキャンプカウンセラーのスパイラルを上向きの形で合流させ複合的にそれぞれの質的次元を高める必要があると考える。野外教育はこのような複合的な教育を可能にする教育形態であり、この特性を生かした研究方法が求められるだろう。ここで、キャンプカウンセラーの意見・感想・提案・反省等の分析をとおしてAとA'の縦方向の格差・キャンプクラフトの問題点を探り、格差を埋めるための望ましいマニュアル作成に向けての検討を行いたいと考える。

キャンプカウンセラーの視点

実際にキャンプクラフトを経験したキャンプカウンセラーは、クラフトをどのように捉え、どのように感じているのであろうか。図1の「C. 評価」としての調査データから、「A'. 分析」としてKJ法⁴⁾的分析を行ない感性的な考察を試みた。

1. 調査日：1993年7月28日、8月1日
2. 場所：静岡県朝霧野外活動センター・山梨県本栖湖青少年センター
3. 主催：山梨大学教育学部山梨幼児野外教育研究会
4. 対象：幼児キャンプ・OBキャンプ担当キャンプカウンセラー男20名、女20名
5. 調査方法：各班のキャンプカウンセラー（男女各1名）がキャンプクラフト指導終了後に『クラフト調査用紙』に記入する。
6. 調査内容：1993年夏のクラフトテーマである「回転弓矢」製作の指導をとおし、キャンプカウンセラーが「カウンセラーの感想・意見」、「子どもの工夫したところ」の2項目を記述

述で記入した内容。

7. キャンプクラフト概要

クラフトテーマ「回転弓矢」は、弓の部分と、回転しながら飛ぶ矢の部分の2つの部分からなる。弓は孟宗竹と凧糸と桧丸棒からなる。矢の部分は先端のゴム栓、本体は桧丸棒、羽根は桧の薄板等からなる。弓の構造は、中央に小穴を開けた弓状の竹の両端に凧糸を張り、竹の弾性を利用して凧糸と結ばれた桧丸棒が弓の穴の開いた部分をスムーズに高速で動くようになっている。矢は先端のゴム栓が安全な適度なウエイトとなり弧を描いて空を飛ぶ構造になっている。また、飛ぶ時は、水につけてねじりを加えた3枚の桧の羽根が空気により矢に回転を与える構造になっている。飛ばし方は、まず、矢の部分を弓の桧丸棒の先端部に装着し、桧丸棒の後端部を持ち、弓の凧糸を引き、手を離すと先端の矢が回転しながら飛ぶというものである。概要を図2、3に示した。

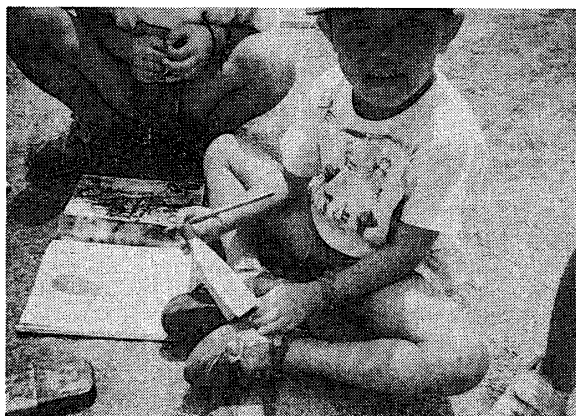


図2 回転矢の部分

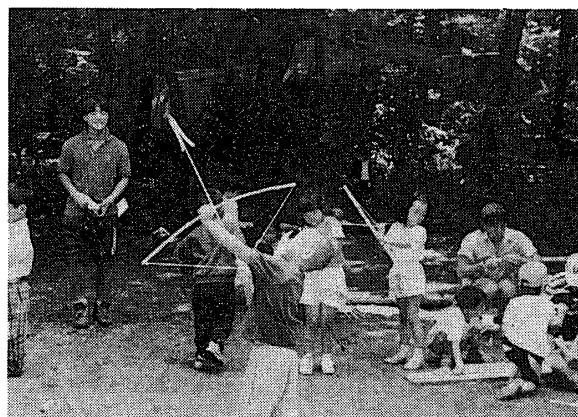


図3 完成

I. キャンプカウンセラーの感想・意見

キャンプカウンセラーの感想・意見として抽出された内容は51種類あった。調査の内容が限定されないので様々な感想が提出された。これらの、キャンプカウンセラーの生の感想をKJ法的に内容の近似性を尺度として分類した結果、内容は大きく4つに分けられた。それらの内容と該当学年・実数を表1～表4に示した。1つは『カウンセラーの指導面で気づいた事項』(表1)であり、2つ目は『子どもの反応に対する感想』(表2)であり、3つ目は『キャンプクラフトのテーマ・内容に対する感想・評価』(表3)であり、4つ目は『素材・道具に関する感想』(表4)である。また、各表中の近似する内容のキーワードを〈 〉内に示した。

それでは1つずつ検討してみよう。1つ目の『カウンセラーの指導面で気づいた事項』(表1)はクラフト指導をとおした反省及び評価の内容であり、指導がうまくできたという感想と、うまくできなかったという感想が出ている。後者の方が多く、次の様な内容である。(2) 予習不足でうまく子どもに対応できなかった。(3) 子ども中心でなくカウンセラー中心になってしまった。(4) 子どもに余裕を持たせられなかった。(5) カウンセラーの指導の要領が悪く作業が遅れた。(6) 泣き出した子どもの対応に追われ子どもの工夫を引き出せなかった。(7) カウンセラーの配慮不足で子どもが道具使用の順番を争った。以上の内容は今までにクラフト指導経験がないか、少ないカウンセラーの感想であるが、クラフト指導は経験が大きな意味を持ち、初めてでは、難しいことが伺える。これらの、うまくできなかったという感想に対して、

表1 カウンセラーの指導面で気づいた事項

- 〈指導がうまくできた〉
 (1) 2回目の指導だったので、スムーズにできた。(小2/1)
- 〈反省〉
 (2) 予習不足で皆く子どもに対応できなかった。(小1/1)
 (3) 子ども中心でなくカウンセラー中心になってしまった。(幼/1)
 (4) 子どもに余裕を持たせられなかった。(小1/1)
 (5) カウンセラーの指導の要領が悪く作業が遅れた。(小2/1)
 (6) 泣き出した子どもの対応に追われ子どもの工夫を引き出せなかった。(幼/1)
 (7) カウンセラーの配慮不足で子どもが道具使用の順番を争った。(幼/1)
- 〈学んだ事項〉
 (8) 幼児は力が弱い技術により補うことを学んだ。(幼/1)
 (9) 技術がないとできないと感じた。(幼/1)
 (10) ただ自由にやるだけでなく、「こつ」を指導する必要がある。(幼/1)
 (11) 子どもの危険な行為をやめさせた。(小1/1)
 (12) 安全面について配慮は行き届いた。(幼/1)
- 〈心で感じた部分〉
 (13) 弓矢を持って一生懸命矢を飛ばしている姿を見て、カウンセラーの心もなごんだ。(幼/1)

() 内は学年と実数

表3 キャンプクラフトのテーマ・内容に対する感想・評価

- 〈良い題材〉
 (26) 子どもの創作欲をそそる良い題材だった。(幼/1)
- 〈壊れやすい〉
 (27) 壊れやすいものだったので、もう少し丈夫なものが良い。(幼/5)
 (28) ゴムの頭が抜けてしまった。(幼/1)
 (29) 矢の押さえが折れてしまった。(幼/1)
 (30) 矢を折ってしまう子が4~5人いた。(小2/1)
 (31) 羽根がとても壊れやすかった。(小1/1)
 (32) すでに壊れてしまい持って帰るまでもつかどうか。(幼/1)
 (33) 家で壊れたら修理することが難しいのではないかと。(幼/1)
- 〈要望〉
 (34) 応用がきかなかった。(幼/2)
 (35) 子ども一人一人の個性が出せるものが良い。(幼/2)
- 〈具体的作業に対する感想〉
 (36) 接着剤を使用しているところが多くこの善し悪しで仕上がりが決まってしまった。(幼/1)
 (37) 風糸と竹を結びつける作業にてこずった。(幼/1)
 (38) 羽根がうまく曲げられず苦労した。(幼/1)
- 〈具体的要望〉
 (39) ボンドを使いやすいものにしてほしい。(幼/1)
 (40) マニュアルを前日までに見せてほしい。(小2/1)
 (41) 1グループの人数が多すぎた。(小1/1)
 (42) 工具は人数分あったほうが良い。待ち時間に無駄が多い。(小3/1)

() 内は学年と実数

表2 子どもの反応に対する感想

- 〈楽しそう〉
 (14) 大変楽しそうだ。(小1・小2/5)
- 〈一生懸命〉
 (15) 先生の説明で早く作りたいという様子で一生懸命作っていた。(幼/1)
 (16) 女子が力のいる作業を一生懸命やっていた。(小1/1)
 (17) 自分ができる次作業に進みたかった。(小1/1)
 (18) 鋸を使っている顔が真剣だった。(小1/1)
 (19) 真剣に取り組んでいた。(幼/1)
 (20) とても意欲的に取り組んでいた。(小2/1)
 (21) できる子どもとできない子どもの差が大きかった。(小1/1)
 (22) 男女の進行における差はない。(幼/1)
 (23) 子ども同士の助け合いがなかった。(小1/1)
- (24) 3年生ではほとんどの子どもが1度の説明で内容を把握できた。(小3/1)
 (25) 弓矢をとても気に入ったようだ。(幼/2)

() 内は学年と実数

表4 素材・道具に関する感想

- 〈きちんと使っていた〉
 (43) 道具をきちんとうまく使っていた。(幼/1)
 (44) 接着剤の凝固時間をきちんと計っていた。(小3/2)
 (45) 道具を初めて使う子が多く、使い方は不安定だが積極的に慎重に使っていた。(幼/1)
 (46) 鋸など使用の際、子ども自身、危険な道具を使っているという自覚があるのか、きちんと使っていた。(小2/1)
- 〈だんだんうまくってきた〉
 (47) 初めての道具使用でもだんだんうまくいった。(小2・小3/2)
- 〈経験の差〉
 (48) クラフト経験のある子どもと初めての子どもの道具の扱いに明らかに差があった。(小3/1)
- 〈問題点〉
 (49) 鋸で木を切る時、木に対して斜めに立っている子どもが目立った。(小2/1)
 (50) 女子は道具の使用に力が入らない。(幼/1)
 (51) 接着剤が少なすぎるような気がした。(小1/1)

() 内は学年と実数

うまくいった内容は（1）2回目の指導だったので、スムーズにできた。であり、やってみないと分からない要素が大きいことが理解される。つまり、今までにクラフト指導経験がないカウンセラーは、クラフトの意味を明確には捉えられず、子どもに作らせることで精一杯であり、子どもの突発的な行動に対応できず、工夫を引き出す余裕はなかったと言えるだろう。また、1回でも指導経験のあるカウンセラーは少しずつ余裕を持って対応することが可能になると思われる。すなわち、40人あまりのキャンプカウンセラーの約半数が初めての指導であることを考えるならば、カウンセラーのクラフトの捉え方に意識の違いがあるのは当然なことであり、少なくともクラフトの捉え方・コンセプトとずれが生じないような何らかのレディネスが必要だと言えよう。

次に、カウンセラーの学んだ事項として、次の様な項目が抽出された。（8）幼児は力が弱いと技術により補うことを学んだ。（9）技術がないとできないと感じた。（10）ただ自由にするだけでなく、「こつ」を指導する必要がある（11）子どもの危険な行為をやめさせた。（12）安全面について配慮は行き届いた。以上の内容から、キャンプクラフトにはある程度の技術が必要と感じ取られている。また道具を使用するうえで、安全面の意識は不可欠であり、更に、指導者が経験でつかんでいる「こつ」の指導も必要だと感じ取られている。すなわち、道具を扱う上で、更に安全面の問題を解決するためにも、道具の扱いに関する何らかのマニュアルが必要だろう。しかし、単なる道具の使用法を明記したマニュアルではなく、経験でしかつかめない「こつ」の指導にも対応できるものが望ましいと思われる。

次に、カウンセラーの心で感じた事項をあげておこう。（13）弓矢を持って一生懸命矢を飛ばしている姿を見て、カウンセラーの心もなごんだ。この内容からはカウンセラーの、指導者としての喜びが感じられる。カウンセラーは経験をとおして「ゆとり」と「喜び」を得ることができる。この「ゆとり」と「喜び」を引き出せるレディネスが必要とも言えるであろう。

2つ目の『子どもの反応に対する感想』（表2）は、（14）大変楽しそうだと実数5、（15）～（20）の一生懸命・真剣・意欲的に取り組んだ内容が実数6と数が多い。これらは、子どものクラフトへの取り組みの姿勢に対する肯定的な感想であると共に、キャンププログラムとしてクラフトが肯定されていると言えよう。また、（21）できる子どもとできない子どもの差が大きかった。という個人差に着目した意見や（22）男女の進行における差はない。（16）女子が力のいる作業を一生懸命やっていた。という男女差に着目した意見があげられている。また、（23）子ども同士の助け合いがなかった。という感想からは、カウンセラー自身の教育目標としての意識が伺え興味深い。このように、カウンセラー個人がそれぞれのクラフトの教育目標を設定して実践することも重要であろう。また、（24）3年生ではほとんどの子どもが1度の説明で内容を把握できた。（25）弓矢をととても気に入ったようだ（実数2）。というクラフトの内容・結果の評価的な感想もあがっている。以上の感想は、いずれもカウンセラーの、子どもを捉える視点が伺える。すなわち、この視点は子どもが意欲的に取り組んだか、子どもの個人差はどうか、男女差はどうか、説明の理解はどうか、作り上げた結果はどうか、といった教育的評価やキャンププログラムとしてのクラフトを評価するチェックの要素として捉えることができる。

3つ目の『キャンプクラフトのテーマ・内容に対する感想・評価』（表3）は（26）子どもの製作欲をそそる良い題材だった。という肯定的なもの他は（27）～（33）の壊れやすい要素があったという内容が実数11と多く、（34）応用がきかなかった。（35）子ども一人一人の個性が出せるものが良い。という要望もあげられた。この問題は、今回のキャンプクラフトの

テーマ(回転弓矢)が空を飛ぶという目的に対応するための、やや高度な工作を必要とする構造としての問題と、カウンセラーの製作指導の問題という二面性を持っている。すなわち、今回のテーマは空を飛び落下するため壊れやすい要素を持っているが、壊れたら直すという工夫や壊れにくい作り方を考えるとといった子どもの行動を促す要素も合わせ持っている。しかし、多くのカウンセラーはクラフトに、壊れない教材としてのある程度の完成度を求めていると思われる。しかし、必ずしも壊れにくいテーマがベストとも言えず、クラフトのテーマ内容は指導面との調和点としての位置付けが求められると言えよう。また、壊れやすいという意見の多くが低年齢の子どもの担当カウンセラーからあがっていることを考えるならば、今回のクラフトのテーマは、クラフト経験のない低年齢の子どもには高度であったと認識する必要がある、指導方法も検討を要するであろう。その他には、表3(36)～(38)の具体的作業に対する感想や表3(39)～(42)の具体的要望があった。これらの内容もレディネスの必要性を示していると言えるだろう。

4つ目の『素材・道具に関する感想』(表4)は(43)～(46)の道具をきちんとうまく使っていた内容が実数5、(47)初めての道具使用でもだんだんうまくなった。が実数2であった。これらの内容から、経験を積んだカウンセラーは道具使用の正しい方法を理解しており、更に、子どもにもできるという実感を持つことができたと思われる。更に、(48)クラフト経験のある子どもと初めての子どもでは道具の扱いに明らかに差があった。という意見は、子どもの道具経験の重要性を裏づけている。また問題点として(49)鋸で木を切る時、木に対して斜めに立っている子どもが目立った。(50)女子は道具の使用に力が入らない。という意見が出されている。これらのことからカウンセラーは、初めて道具を使用する子どもに対して的確な指導をする必要がある、そのためのレディネスが必要であることが理解される。

以上のキャンプカウンセラーの視点をとおした検討から次のように言えるだろう。子どものクラフトの指導を行うキャンプカウンセラーは未経験者が含まれる。彼らにとって初めてのクラフト指導は、指導面・道具使用共になかなか難しい状況である。クラフトは基礎的技術を必要とし、「こつ」を含めた道具使用のためのマニュアルが不可欠である。また、カウンセラーから、教育の姿勢・目標・喜びを引き出す何らかのレディネスも必要である。今回のクラフトテーマである「回転弓矢」は低年齢の子どもにはやや高度であり、壊れやすいという問題があったが、クラフトテーマの内容は指導との調和点が求められる。一方、子どもが、様々な道具を使用することは充分可能であるが、経験による個人差が大きい。特に初めてクラフトを経験する子どもには、道具の正しい指導が必要であり、これらはマニュアルに明確に示さねばならない内容である。

Ⅱ. 子どもの工夫したところ

キャンプカウンセラーが子どもの観察を通して、「子どもの工夫したところ」として記録した44種類の内容を、KJ法的に分析して表5～表7に示した。今回のキャンプクラフトが子どもの主体性を引き出し得るテーマであったかという視点を含めて「工夫」の内容を検討し、キャンプクラフトの望ましいあり方・望ましいテーマの方向性・マニュアルに求められる要素を検討したいと考える。

まず大きく分けて「工夫した(実数54)」と「工夫しなかった(実数11)」に分けられた。抽出された内容の実数は「工夫した」が「工夫しなかった」の約5倍であり、かなり多くの工夫が観察された。『工夫しなかった』(表5)の内容を見ると、(3)～(5)の、作ることに精

表5 工夫しなかった

- 〈うまくいかなかった〉
- (1) ドリル穴が斜めに開いてしまった。(幼/1)
 - (2) 羽根があまり飛ばず機嫌を悪くして工夫しなかった。(小2/1)
- 〈工夫しなかった〉
- (3) 工夫しなかった。(小1・小2/3)
 - (4) 完成が遅くほとんど工夫できなかった。(幼/1)
 - (5) 作ることに精一杯で工夫までできなかった。(小1/3)
 - (6) ホームシックにかかり、カウンセラーがつきっきりでやっと完成した。(幼/1)
 - (7) 完成した作品での遊びに夢中で工夫しなかった。(小2/1)

() 内は学年と実数

表6 積極的な態度で工夫した

- 〈丁寧に道具を用いて加工した〉
- (8) 一つ一つ丁寧に部品を仕上げている。(小2/1)
 - (9) きっちりした正確な羽根を作っていた。(小2/1)
 - (10) 丸棒が良く滑るようにヤスリをかけていた。(小2/1)
 - (11) 棒にゴムを差し込むところを工夫した。(小1/1)
 - (12) 羽根の先が薄くなるまでサンドペーパーをかけた。(小2/1)
 - (13) 羽根のゴム栓押さえ板もヤスリできれいにしていた。(幼/1)
- 〈道具使用に工夫した〉
- (14) 刃物が危ないことや使い方を良く理解していた。(幼/1)
 - (15) 万力をしっかり固定していた。(幼/1)
 - (16) 自分から進んで道具を使っていた。(幼/2)

() 内は学年と実数

表7 具体的に工夫した

- 〈工作法を工夫した〉
- (17) 羽根を曲げるのに工夫した。(小2/2)
 - (18) 丁寧に羽根を曲げる作業をした。(小3/1)
 - (19) 羽根を少しずつ曲げるように工夫していた。(小2/1)
 - (20) 風糸を一人で竹にうまく張ることができた。(幼/1)
 - (21) 風糸を強く張っていた。(小2/2)
 - (22) 風糸の長さを考えていた。(小3/1)
 - (23) 風糸の先をなめて小穴に通りやすくしていた。(小2/1)
- 〈パーツの形・色を工夫した〉
- (24) 羽根をいかに丸くするか頑張っていた。(幼/1)
 - (25) 羽根の形を丸くした。(小3/2)
 - (26) 羽根を斜めにした。(小1/4)
 - (27) 羽根を木の葉形にした。(小3/1)
 - (28) 羽根を虫の形にした。(小2/1)
 - (29) 羽根をうさぎの耳の形にした。(小2/3)
 - (30) 4枚羽根にした。(小3/1)
 - (31) 割れた形を羽根にした。(小2/1)
 - (32) 羽根の固定にみんなとは異なった材料を使った。(小3/1)
 - (33) 羽根に棒をつけて弓矢の矢を作った。(幼/1)
 - (34) 色を塗っていた。(小3/1)
 - (35) 羽根に絵を描いたり、色を塗ったりしていた。(幼/2)
 - (36) 色をつけていた。(小1/5)
 - (37) 時間がなく色を塗る程度だけ。(幼/2)
 - (38) 羽根に絵を描いていた。(小2/2)
 - (39) 羽根に装飾を施した。(小3/1)
 - (40) ボンドで名前を書いた。(小3/1)
- 〈遊ぶ工夫をした〉
- (41) 良く飛ぶ様に何度も改良を重ねた。(小2/1)
 - (42) 遠くへ飛ばすために人にその方法を聞いたり改良してもらったりしていた。(幼/1)
 - (43) 飛ばした後に良く観察してどうすればよく飛ぶのか工夫した。(小2/1)
 - (44) なるべく丈夫にしようとしていた。(小2/1)

() 内は学年と実数

一杯で工夫できなかった内容が実数7で、今回のクラフトは、初めて経験する子どもには高度であり、それにともない製作時間が短いという問題が指摘されている。特に初めて参加する子どもたちが主体的にクラフトに関わる教育的対応の内容がマニュアルに含まれている必要があると言えるだろう。その他に(6)ホームシックにかかり、カウンセラーがつきっきりでやっと完成した。があり、工夫できない要因は、疲れ、病気等を含め子どもに精神的なゆとりがなく、もの作りに集中できない場合もあることが分かる。また、(1)ドリル穴が斜めに開いてしまった。という内容は製作自体がうまくいかなかった例であり、道具を的確に使用できることが工夫を生む要件の一つであることが伺える。また、(2)羽根があまり飛ばず機嫌を悪くして工夫しなかった。は子どもの気分によっても工夫しない場合があり、子どもの工夫したいという意志を引き出す教育的かわりも必要となる。一方(7)完成した作品での遊びに夢中で工夫しなかった。は、工夫しなくても遊べるためと思われるが、キャンプクラフトが完成されすぎた教材になってはいけなことを認識しておかねばならない。

次に、工夫した内容を検討してみよう。内容は大きく分けて、子どもの積極的な態度に目を向けたものと、具体的な工夫内容に目を向けたものに分けられた。前者の『積極的な態度で工

夫した』(表6)の内容は子どもの態度に目を向けた〈丁寧に道具を用いて加工した〉内容と、子どもの道具の扱いに目を向けた〈道具使用に工夫した〉内容に分けられた。また、後者の『具体的に工夫した』(表7)の内容は、作業に目を向けた〈工作法を工夫した〉と、ものとしての要素に目を向けた〈パーツの形・色を工夫した〉と完成後の遊びに目を向けた〈遊ぶ工夫をした〉の3つの要素が抽出された。

では、工夫内容を具体的に検討してみよう。表6の〈丁寧に道具を用いて加工した〉内容は、(8)一つ一つ丁寧に部品を仕上げている。(9)きっちりした正確な羽根を作っていた。(10)丸棒がよく滑るようにヤスリをかけていた。(11)棒にゴムを差し込むところを工夫した。(12)羽根の先が薄くなるまでサンドペーパーをかけた。(13)羽根のゴム栓押さえ板もヤスリできれいにしていた。である。以上の内容から、カウンセラーは、子どもが一つ一つの作業を意欲的に丁寧に取り組んでいる様子として「工夫」を捉えている。つまり、独創的な工夫ではなくても木にヤスリをかけるだけでも工夫が必要という捉え方である。また表6の〈道具使用に工夫した〉内容は(14)刃物が危ないことや使い方を理解していた。(15)万力をしっかり固定していた。(16)自分から進んで道具を使っていた。という内容であり、子どもが道具を適切に使用する様子を「工夫」として捉えている。これは、カウンセラーの、道具の扱い方の知識を前提とした視点であり、経験をとおして、道具使用にも「工夫」が必要であることを明確にしている。次に『具体的に工夫した』(表7)の3つの内容を検討しよう。

1つ目は〈工作法を工夫した〉内容である。これはさらに、羽根に関する内容と凧糸に関する内容の2つに分けられた。前者の内容は(17)羽根を曲げるのに工夫した。(18)丁寧に羽根を曲げる作業をした。(19)羽根を少しずつ曲げるように工夫していた。である。今回のクラフトの桧の薄板を曲げる作業は、水に桧の薄板を浸し、柔らかくした後少しずつ曲げるという比較的高度なものである。ここに出された内容は小学2・3年生の行動であり、一見工夫とは思われないが、うまく曲げるための行為が、カウンセラーには「工夫」として捉えられたのだと思われる。つまり、この作業はやってみないと分からない「経験」が重要であり、「こつ」をつかむうえにも子どもの経験をとおした「工夫」が必要なのである。後者の凧糸についての内容は、(20)凧糸を一人で竹にうまく張ることができた。(21)凧糸を強く張っていた。(22)凧糸の長さを考えていた。という様に、弓にするために曲げた竹に凧糸を取りつける作業である。この作業も経験しないと分からない要素である。また、(23)凧糸の先をなめて小穴に通りやすくしていた。という内容も含めて、これらの行為は経験をとおした知恵の獲得であり、伝統的な学びとも言えるであろう。このように、大人にはあたり前のできる行為でも、それを獲得する前の子どもには、様々な「工夫」が必要なのである。この意味で、クラフトは、具体的に明確な「工夫」の他にも多くの、子どもなりの「工夫」を誘発するものとしても位置付けられるだろう。そのため、クラフトテーマは、単なる子どもの工作としてではなく、機能を持った本物が求められると考える。

『具体的に工夫した』(表7)の2つ目は、具体的にものとしての要素に目を向けた〈パーツの形・色を工夫した〉という内容である。これは、羽根の形を工夫した内容(実数16)と色・絵をつけた内容(実数14)の2方向に分けられ、子どもの具体的な工夫の多くが、この、形の工夫と色に関する工夫に集中した。前者は、(24)羽根をいかに丸くするか頑張っていた。(26)羽根を斜めにした。(27)羽根を木の葉形にした。(28)羽根を虫の形にした。(29)羽根をうさぎの耳の形にした。(30)4枚羽根にした。(31)割れた形を羽根にした。というように具体的に形を変えたものと(32)羽根の固定にみんなとは異なった材料を使った。(33)羽根に棒

を付けて弓矢の矢を作った。という様に、みんなとは羽根以外も異なったものを作ろうとした内容の2パターンがあげられた。内容は高学年ほど高度であり、工夫への意欲も高学年の子どもの方が大きい傾向が認められた。つまり、形の工夫をしようとする意志は、経験の有無が大きく関わっており、幼児より小学生の方が大きいと言える。後者の、色・絵をつけた内容は(34)～(38)であり実数12であった。また、(39)羽根に装飾を施した。(40)ポンドで名前を書いた。も同様の内容であり、これらの、色をつけたり絵を描いたり飾るといった作業は子どもにとり、自由な楽しい工夫として捉えられている。キャンプクラフトにはこのような自由のできる要素も確実に取り入れておく必要があると思われるが、色をつければ良いというような安易な発想をしないという留意も必要である。

『具体的に工夫した』(表7)の3つ目は〈遊ぶ工夫をした〉である。実際には、良く飛ぶ工夫をした内容として(41)良く飛ぶ様に何度も改良を重ねた。(42)遠くへ飛ばすために人にその方法を聞いたり改良してもらったりしていた。(43)飛ばした後に良く観察してどうすれば良く飛ぶのか工夫した。(44)なるべく丈夫にしようとしていた。があげられた。これらは、子どもの飛ばしたいという遊びの欲求から工夫を導いており、この根源的な遊びの要求は工夫を導く大きな原動力になっていると言える。つまり、子どもの遊びたいという要求を刺激するクラフトが求められている。

今回のクラフトテーマ『回転弓矢』は桧の薄板を水につけ曲げるといった比較的高度な工作を必要とするため、当初は「工夫」はあまり行われなかったのではないかと考えていたが、予想以上に子ども達は「工夫」を行っていることが明らかとなった。また、工夫の内容は多岐に渡っているが道具の基本的な使用能力がその基礎になっており、様々な道具経験の積み重ねが何より重要であることが伺える。この意味で、子どものやってみたいという根源的な意欲とそれに誘発される「工夫」が大きな価値を持ち、子どもにとり、魅力的な本物のクラフトテーマが求められる。この意味で、クラフトテーマと道具使用が調和する方法論がマニュアルに求められると言えよう。

結 語

子どもの造形活動は、あくまで子どもが主体であり、子どもが作らされるものづくりではない。しかし、キャンプクラフトは時間的・空間的に制約が多く、また目的を持った製作であるため、キット的なものづくりになりやすい要素を持っている。そのため、キャンプクラフトはより望ましい方向性の模索と、調和点を求めなければならない。今回はその作業をスパイラルエデュケーションとして捉え、直接子どもたちに関わるキャンプカウンセラーを、指導者と同時に学習者として位置付け、彼ら一人一人の視点をとおし、具体的に検討して次の結果を得た。

キャンプクラフトを指導するキャンプカウンセラーの、約 $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{1}{2}$ はキャンプクラフト未経験であり、彼らにとり初めてのクラフトの指導はかなり難しいことが明らかとなった。また、道具使用に関する基礎技術がないと、初めて道具を使用する子どもへの適切な指導ができず、その結果、子どもの工夫しようとする意欲も引き出せないことが明確となった。そのため、未経験のカウンセラーに対するレディネスが必要であり、カウンセラー全員がキャンプクラフトテーマに関する共通コンセプトを持つとともに、使用道具に関して基本的理解を持つことが必要となる。そのためには教育面と技術面に対応する、キャンプクラフトテーマと道具使用に関するマニュアルが不可欠である。このマニュアルをキャンプクラフト未経験のキャンプカウンセ

ラーのためのレディネスとして使用し、スパイラルエデュケーションに当てはめることにより、分析→総合→評価の上向きのスパイラルを構成しキャンプクラフトの質的次元を高めることができる。一方、カウンセラーの視点をとおして子どもの工夫を見ると、予想以上に様々な工夫がなされたことが明らかとなった。しかし、子どもに道具使用の基礎的技術がないと、作った作品が壊れやすく、その結果、子どもの遊びへの興味も半減してしまう。つまり、子どもの主体的な造形活動の質は、道具の基本的な使用能力とそれによる経験の積み重ねにより決定されると言えるだろう。すなわち、子どもの作りたいという意志を引き出す魅力的なクラフトテーマと子どもが確実に道具を使用できる指導が調和すれば、子どもは経験をとおし自ら工夫を行い、創造的な造形活動を行うと考えられる。このような、子どもの主体的な工夫を引き出すためにも指導者用のマニュアルの作成が必要となる。今後はキャンプクラフトにおける、子どもの道具使用の実態を分析したうえでキャンプクラフトマニュアルを作成する予定である。尚、本稿は、名古屋女子大学教育研究所、平成5年度の一般研究助成による成果の一部である。

注

- 1) 日本野外教育研究会監訳 『ティーチング イン ザ アウトドアーズ』 1989 杏林社
p 50
- 2) 前掲書 p 53
- 3) 平野拓夫氏によるデザインの方法論に関する解説による。
- 4) 川喜田二郎 『続・発想法』 1976 中央公論社 p 48～p 98